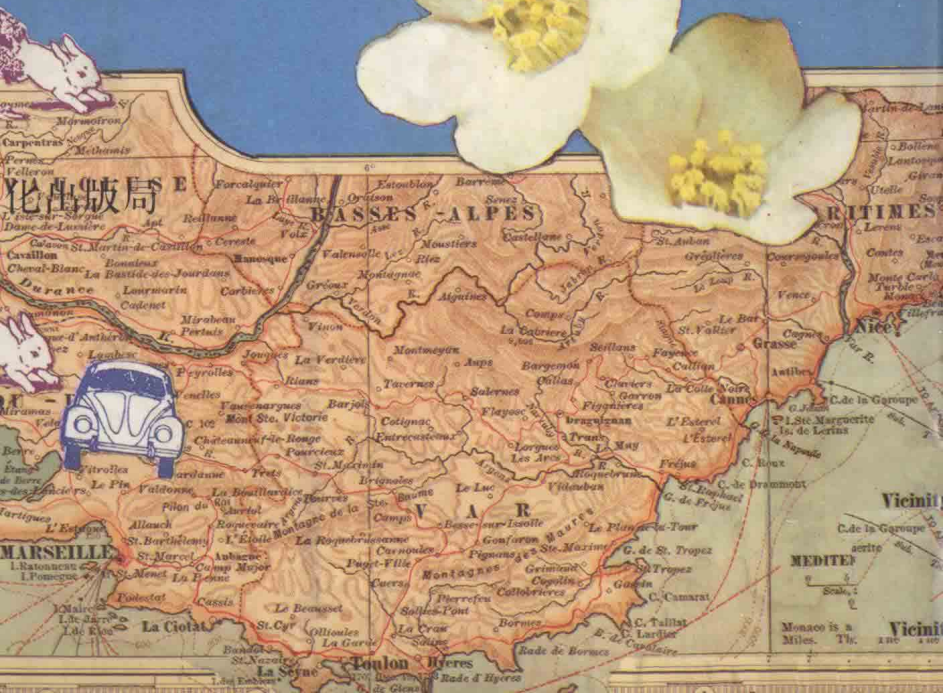
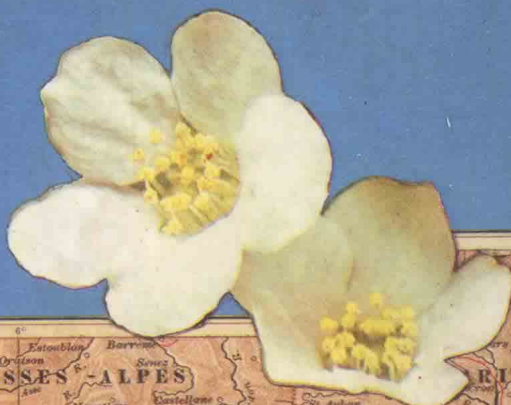


女ざかりからの旅

桐島洋子



女ざかりからの旅

桐島洋子

文化出版局

女ざかりからの旅

定価八八〇円

昭和五十七年九月 十二日 第一刷発行
昭和五十七年九月二十七日 第二刷発行

著者 桐島洋子

発行者 大沼 淳

発行所 文化出版局

東京都渋谷区代々木三の二の一

郵便番号 一五一

電話 (〇三)三七〇三一一(代表)

振替 東京二一九五六七〇番

印刷所 カバー・表紙 文化カラー印刷

本文 堀内印刷
製本所 明泉堂

女メざかりからの旅
目次

元旦の饒舌

7

気ばたらき手ばたらき

19

娘たちへ桃の節句に

35

病床から

49

選択の季節に

63

友へ、朝日の中で

77

さよならに代えて

91

亡き父のこと——見知らぬ妹へ

107

方舟の休日

121

私の一週間

135

マルセイユの魚市場から

151

リペール夫人の食卓から

165

ヌーヴェル・キュージーヌの魚料理から

179

失われた故郷を求めて

195

あとがき

216

装幀
野中ユリ

女ざかりからの旅

元旦の饒舌

私はもの書きだから、普通の人よりは書くことが多いわけだけど、それでかえって手紙というものが書けなくなってしまう。仕事として構えて書くくせがついてしまふと、昔のようにおしゃべりがそのまま文字には流れないのです。かつて私にとって、書くということはほとんど手紙を書くことであり、文章はすなわち会話でありました。あの優しく弾力的な手応えを私は近頃しきりと懐しく思い出し、あれをもう一度この手に取り戻そう、日常の饒舌として身近な仲間たちにこそ筆マメに手紙を書こうと思ひ立ったのです。

何も遠く離れていなくて手紙が書けないってものじゃないのですものね。しゃべりたい人はいくら遠くに離れたって電話でしゃべることができる世の中なのだから。逆に、書きたい人はたとえ一緒にいたって手紙を書き合えばいいのです。

そんな当り前のことを、私は久しく忘れていたけれど、この間、恋人にものの弾みで後朝きぬぎぬの文をしたためたとき、あ、そうだ、こういうコミュニケーションもあったのだと思ひ出して嬉しくなりました。

昔は男が女の許に通ったわけだけど、夜があけて家に帰った男は、ただちに想いをこめた和歌をしたためて使いに持たせ、それに対して女もまたただちに返歌を届けるとい

うのだから、文才がなければおちおち恋もできないみたい。いや、文才だけではすまないのです。その文にどんな材質の何色の紙を使い、何の折枝に結ぶかというのが、彼または彼女の美意識と才氣と季節感を賭けた重大な選択でした。

『枕草子』の三十九段に「むらさきの紙に楝あふちの花、あをき紙に菖蒲の葉、ほそくまきてゆひ、また、しろき紙を、根してひきゆひたるもをかし。いとながき根を、文のなかに入れなどしたるを見る心地ども、えんなり」とあるでしょう。他にも「あをき薄様」の紙に「柳の萌え出でたる」枝とか、「香の紙のいみじうしめたる」紙に「萩の、露ながらおしをりたる」枝とか、『枕草子』だけでも数えきれないほど、さまざまな料紙と折枝の組合せが出て来ます。まあだいたい同系色で合わせるのが原則のようだけど、その上に折々の行事や状況とのからみもあって、その発想や工夫は複雑微妙を極めます。心がさめた恋人をなじる恋文を、色香のさめた菊や枯れたすすきに結ぶなんてゾツとするほど凄いと思いませんか。野分の吹きまくる日には、吹き乱れた刈萱に手紙を結ぶというものもあるし、いまだきのファッション感覚など及びもつかないですよ。

さて、私がものの弾みで書いた後朝の文の件に話を戻します。

そのとき、仕事の都合でひどく後朝の別れがあわただしくて、打合せし忘れたことが

あったのでした。それで私は彼にメモを残そうとしたのだけれど、簡単なメモのつもりが書いているうちにどんどん膨んで一大ラヴレターになってしまったのです。逢うたびに心ゆくまでしゃべっているようでもずいぶん言い残していることがあるものだし、胸の奥になんとなくわだかまっていたようなことも書くことによってほだけだすことが多いものです。今までだって外国にでも出かけたときは手紙を書いたけど、そういう手紙は行く先々の出来事の報告が主だから、あまり内面的な話にはなりません。でも今しがた別れたばかりという余韻の中で書く手紙は、数時間前の会話の続きを、にわかに深々と掘り進んで思いがけない地層を探り当てたりすることがあるのです。これからもせいぜい後朝の文のやりとりを心がけましょう。

「でも花より団子派のぼくたちとしては、折枝より何か美味しいものに恋文をつけたほうがいいかもしれないね」と彼が言い、

「それじゃ、フォーチュン・クッキーじゃないの」と笑ったのですが、御存じでしょ、よく中華料理屋で最後にサービスに出て来るオミクジ入りのクッキー——あれはなんとなくタノシイものですよね。

アメリカにしばらく住んだときは私もヒマだったから、名前を焼き込んだお菓子やキ

ヤツチフレーズ入りの弁当で、しばしば子供たちを喜ばせました。こういうことって、あんまりやりすぎると嫌味だけれど、折にふれてどこかに軽やかに工夫して優しいメッセージを贈り合うような余裕と洒落っ気が、日常の暮しの中にほしいと思います。

でも近頃の我家はもう全くそれどころではありません。私がいよいよ忙しくなって子供たちとつき合う時間がないということもあるけれど、それ以上に子供たちの親離れが急激に進行してしまって、タマに私がヒマで家にも彼等は振り向いてもくれないというテンデンバラバラの家族になってしまいました。これでいいのかなあ、いやいくらなんでももう少しはコミュニケーションがなくなちゃいけないんじゃないかしら、 magari なりにも人生の先輩として彼等の育成の任に当たってるんだもの……と、私もさすがに反省しはじめたのです。

そこへこの間、ちょっととした発見がありました。私の部屋から消え失せた辞書を探しに娘の部屋に入って行った私は、長女のベッドの上に放り出してある分厚いノートを何気なくパラパラとめくって、それが友達との交換日記であることに気がついたのです。なるほど、これはよくある場面だゾと思いましたね。こうして娘の思いがけないプライバシーを識らされた母親が娘を詰問するとか、娘も母の卑劣をなじるとか……。でも私

は危く踏みとどまりました。その日記がかなり読みにくいハンドライティングの英語だったことがさいわいしたのです。もし日本語ならパッと開いた瞬間だけでも何かしら読みとれるから、そこになにか刺戟的な語句があればそのまま好奇心に負けて読み進めてしまったでしょうね。でも娘の身になって考えれば、母親に日記を覗かれるぐらい気色の悪いことはないですよ。我慢してよかったと思います。

でも娘のヤツ、あのブッキラボーが友達とならこんなに熱烈に語りたがるのかと思うと、妬ましさのようなモヤモヤがしばらく私の胸にたちこめました。

そしてしばらくしてから、そうダウチにも一冊交換日記を置いてみようと思いついたのです。日記というより連絡ノートという程度のさりげないものでいい。なにしろ出入りのほげしいすれちがい家族だから、今までもしじゅうお互いに「今日は東京に泊まります」とか「給食費置い」とかあちこちにメモを書き散らして連絡を取り合ってきたのだけれど、それを一冊のノートに書き込むようにすれば混乱も少なくなるし、家族の動向を一目で把握しやすいし、それが記録として残るから長期的な軌跡の展望もきくようになります。どっしりしたノートに書き込むのですから、紙の切れっ端に走書きするよりは気分が落ち着き、一言か二言は多くなるでしょう。そのうちだんだんと言葉

のやりとりに慣れて、書き合い反応し合うことが面白くなればしめたもので、もっとも
っと突っ込んだ応酬になり、やがては今までにない深い会話が成立するようになるかも
しれない。うまくそこまでいけば、このノートは非常に重要な役割を持つことになるで
しょう。子供たちがいわゆる思春期にさしかかるこれからの数年間は人生の激動期です
ものね。彼等が行き当たるいろんな問題を素直に持ち出して相談できるような精神的土
壌をここに耕しておけば、私だってかなり役に立つ助言者になれると思うのですよ。

近くに住む私の母も、このノートの仲間に入ってもらいます。私はウチの子供たちに
もまして親に無愛想な娘で、そばにいながらほとんど口をきかないのです。母の欲求不
満は十分想像がつくんだけど、どうも億劫で減多に話しかける気になれないし、つい
にたまりかねたように母から話をしかけてくるときというのは、また極めてタイミン
グ悪く、私が考えごとで頭をいっぱいしているときばかりなのです。そういうときの私
はたいてい何もせずに独りでボンヤリ坐っているから、いかにもヒマそうに見えるので
しょうが、実は物凄い精神的格闘のさなかにあるわけだから、母のおしゃべりにかか
らって余裕なんてあろうはずがなく、ケンもホロロにソッポを向いてしまうより他な
いのです。でも母がモノ言いたいときにそれをノートに書き込んでおいてくれれば、私

もそれを読みたい気分るときに読み、答えたい気分るときに答えを書き込めばいいでしょう。同じノートの中で彼女は三人の孫たちとも語り合えるわけだし、娘と孫の語らいを聴くこともできる。つまり混沌とした家族の情景の中に「同居」できるわけだから、いくぶん彼女の疎外感も和らぐのではないかと思うのですが……。

このわが家の連絡ノートの他に、私はもう一冊同じようなノートを別の場所にも置くことにしました。

実は私、この冬から赤坂に秘密のアジトを作ったのです。と言ってしまったらもう秘密にはならないけれど、どうせすぐわかってしまうことですものね。

横浜の住み心地に愛着しながらも、仕事や友達つきあいにいささか不便をかこっていた私は、なんとか都心に基地を設営しようと、ずいぶん前から考えていました。若い娘時代、芝や六本木のアパートにしじゅうにぎやかに人を集めて過ごした夜の豊かさ愉しさを思い出すとムズムズして、いつかあのキリ・サロンを復活させてやろうと思ったのです。私も仲間たちも、あの頃よりずっと成熟し充実したいま、もっと豊かでもっと愉しいサロンが開かれてしかるべきだと思うのですね。

これからの人生でいちばん大切なものは同世代の仲間たちです。もう子供たちが巣立